

論文審査の結果の要旨

氏名 飯田真紀

本論文は、広東語の文法カテゴリーの一つである文末助詞を対象に、構文論および談話文法の観点から、意味機能の体系的記述と構文的な位置づけを試みたものである。日本語の終助詞にも似て話し手のさまざまなモダリティを担う文末助詞というカテゴリーは、中国語において汎方言的(pan-dialectal)に存在する文法カテゴリーであり、その内実は意味的にも形態的にも方言ごとに多様な様相を示す。なかでも、香港・広州を中心に中国東南地域で広く話される粵(エツ)方言、いわゆる広東語には、音韻的な変異も含めて数十種にもものぼる文末助詞が存在し、方言文法の分野では比較的早くから注目を集めてきた。しかしながら、先行研究のほとんどは羅列的な記述や恣意的な分類に留まり、理論的な評価に堪え得るものがほとんどない。本論文は、先行研究が等閑視してきた、当該形式の意味機能と構文的機能の対応関係を重視するという文法研究の基本に立ち返り、加えて、日本語などの終助詞研究や談話文法に関する近年の成果を踏まえた筆者独自の新たな分析の視点を意欲的に導入し、実証的かつ理論的に広東語文末助詞の体系的な枠組みを明らかにすることに成功している。

本論文は7章から成り、まず第1章では、主たる関連先行研究の成果が丹念に検証され、未解決の課題や問題点が的確に指摘された上で、それらを克服すべく、本論文の問題認識、理論的コンセプト、考察範囲および目標が提示される。当該の語類が、シンタグマティックな関係とパラダイグマティックな関係を軸に、複数の下位類によって相関的・体系的に構成される文法カテゴリーであるという認識が従来の先行研究には欠けていたという筆者の指摘はとりわけ重要であり、この認識こそが本論文の成功を決定づけているとも言える。

第2章では、本論文が取り上げる19種の常用文末助詞について、1)それらが生起する構文の類型的特徴、2)文末助詞間の統語的な承接(接続)関係、3)文末助詞間の音声的な類縁性などを根拠に、それらが大きく4つの類(A類からD類)にサブ・カテゴライズされる可能性が明らかにされ、文末助詞というカテゴリーのアウトラインが明確に示される。

第3章から第6章までの四章ではそれぞれA、B、C、Dの四類に関する詳論が展開され、各類に属する具体的な形式の意味機能が、さまざまな構文のおよび談話論的振る舞いに裏づけられて、対立的かつ有機的に特徴づけられる。A類に属する“住”や“嚟”は「コトの時間的なあり方」を示し、“先”や“添”は「コトとコトの関係的なあり方」を示す；B類に属する“嘅”は、コトの個別性を捨象し「命題をモノ化する」；C類に属するI- は、「コトを新たな事態と見做す」話し手の<見立て>を示し、j- は「コトを相対的に価値の低い、取るに足りない事態と見做す」話し手の<見立て>を示す等々の特徴づけは、いずれも先行研究を凌駕して新しく、またモダリティ論としての一般性にも富んでいる。さらに、D類に属して対人的なムードを担う一連の形式の意味的対立が、<発言内容の出所が話し手自身であるか否か>、<発話内容が聞き手の知識に依存するものであるか否か>等々の談話的指標に動機づけられているとする指摘も啓発性に富み、かつ妥当性が高く、今後の関連研究の発展に有力な指針を与えるものとして評価される。

最後に第7章では、上記四類に関して、類間の対立と相関の関係が論じられ、意味的にはA<B<C<Dの序列で、(コト目当てではなく)聞き手目当ての対人的なムードを担う性格が強くなり、また、それに対応して、構文的にも、対人性のより強い類が、文のより外側(右側)の位置に生起するという、意味と構造の相関関係が鮮やかに示される。

広東語文末助詞のカテゴリーの体系を、構文的な裏づけを以って、初めて明らかにした本論文は、記述と理論の両面において従来の広東語文末助詞研究の水準を大きく上回るものである。広東語以外の方言の関連先行研究に対する目配りが必ずしも十分ではないこと、論述の筆致に洗練の度合いを欠く部分が若干認められることなど、いくつかの改善点を含みはするものの、それらは、中国語の方言文法研究に大きな前進の一步をもたらした本論文の価値を些かも損なうものではない。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。